

6-7 唯物史観を正しく理解するために

「歴史における究極の規定要因は、」経済的要因である。現実の世界にあるのは、「経済的な状態が土台ですが、しかし上部構造のさまざまな要因」の交互作用であり、「全ての無数の偶然事を通じて、終局的には経済的運動が必然的なものとして自己を貫徹します。」

そして、この理論は、マルクス・エンゲルスの原典で研究してほしい。正しく理解しないと「おどろくべきがらくたをつくりだ」すことになる

⑤-[151]P333-339全文

「……唯物史観によれば、歴史における**究極**の規定要因は、現実の生の生産および再生産です。それ以上のことは、マルクスも私もかつて主張したことはありません。いまこれを、経済的要因が**唯一**の規定的要因である、というふうになじまげる人があるならば、その人は、あの命題を無意味な抽象的な不合理な空語にかえてしまうのです。経済的な状態が土台ですが、しかし上部構造のさまざまな要因、すなわち、階級闘争の政治的諸形態とこの闘争の諸結果——勝利した階級がたたかいに勝ったのちに確立する諸制度、その他——法律的諸形態、さらにはこれらすべての現実の闘争が参加者の頭脳にうつしだす反射、すなわち、政治的・法学的・哲学的諸理論や宗教観とその教義体系への発展でさえも、歴史的闘争の経過にその作用を及ぼし、多くの場合にこの闘争の**形態**を主として規定します。そこにあるのはこれらすべての要因の交互作用であって、そのうちにあって、すべての無数の偶然事(すなわち、それらの相互の内的関連がひどく遠いかあるいは証明できないために、われわれがそういう関連を存在しないものとみなし不問に付してもかまわないような事物や事件)を通じて、終局的には経済的運動が必然的なものとして自己を貫徹します。もしそうでないなら、理論を任意の歴史時代に適用することは、じっさい、簡単な一次方程式を解くよりももっと容易なことになるでしょう。

われわれはわれわれの歴史を自分でつくりますが、しかしそれは、第一に、まったく特定の諸前提と諸条件とのもとでのことです。それらのなかでは経済的な前提と条件が終局的に決定的なものです。しかし政治的、等々の前提や条件も、いな人間の頭につきまどっている伝統でさえも、決定的な役割でこそないが、ある役割を演じるのです。プロシヤ国家も、歴史的な・究極においては経済的な・原因によって成立し発展してきました。しかし、だからといって、次のように主張するとしたら、それは杓子定規というものでしょう。すなわち、北ドイツの数多くの小国のなかでまさにブランデンブルクが、南ドイツにたいする北ドイツの、経済上・言語上・および宗教改革以後はまた宗教上・の差別を体現した大国になるようにさだめられたのは、経済的な必然性によるもので、他の諸要因(とりわけ、ブランデンブルクがプロシヤを領有した結果としてポーランドとの・そしてそれを通じてまた国際政治関係との・かかりあいを生じたこと、——この国際政治関係はそれどころかまた、オーストリア王家の権力の形成にも決定的にはたらいている)はこれにあずかるところがない、などと主張することです。過去および現在のドイツの各小邦の存在やら、あるいはまたズデーテンからタウヌスにいたる山脈によってつくられた地理的隔壁をドイツを横切る本式の割れ目にまで拡大した高地ドイツ語の子音推移の起源やらを、経済で説明しようなどとするものがあれば、物笑いの種にならずにはすまないでしょう。

また第二に、歴史がつくられるのは、最終結果がつねに多くの個別意志の衝突から生じ

るという形においてです。それらの個別意志のおのおのは、これはまたこれで、多くの特殊な生活条件によってその現在あるようなものにつくられているのです。したがってそこには、相互に交錯する無数の力、力の平行四辺形の無限の群れがあって、そのなかから一つの合成力——歴史的成果——が生じてくるのです。そして、この合成力自体は、さらに、全体として**無意識**かつ無意志に作用する一つの力の所産とみなすことができます。というのは、各個人の意欲するものは他の各人によって妨げられ、生じてくるものはだれも意欲しなかった或るものだからです。こうして、従来の歴史は一個の自然過程の仕方経過しており、そして本質的にはまた同一の運動諸法則に従っています。しかし、もろもろの個別意志——そのおのおのは、各自の体質や、外的な・究極においては経済的な・事情(彼自身の個人的な事情にせよそれとも一般的社会事情にせよ)によってせまられるところのものを意欲する——が自分の意欲するものを達成せず、一つの総平均に、一つの共通な合成力に融合するからといって、そのことから個別意志=0とおくべきだ、などという結論をひきだしてはなりません。それどころか、おのおの個別意志は合成力に参与しているのであり、そのかぎりにおいてこの合成力に含まれているのです。

それから、どうかこの理論を、また聞きによってでなく原典で研究していただきたい。じっさい、そのほうがずっと容易なのです。マルクスの書いたもので、この理論がある役割を演じていないものはほとんどありません。だが、とくに『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』は、この理論の適用のまったくすぐれた手本です。『資本論』にも同様に多くの言及があります。それから私はあなたに拙著『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』と『ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結』をすすめることをお許し頂きたいと思います。これらの著書で私は、史的唯物論についての、私の知るかぎりでは現存のものの中で最も詳細な説明を与えておきました。

若い人々がときおり経済的な側面を過当に重視していることについては、マルクスと私自身がその責めの一部を負わなければなりません。われわれは論敵にたいして彼らの否定する主原理を強調しなければならなかったし、またそのさい、交互作用に関与する他の諸要因にその正当な地位を与える時、所、機会が、かならずしもつねに存在していたわけではなかったのです。しかし、歴史の一節を叙述する段になるやいなや、したがって実際に適用するだんになるやいなや、問題は別のものとなり、そこではなんらの思いちがひも起こりえませんでした。しかし、遺憾ながら、主要な諸命題をのみこむ——しかも、つねに正しくのみこんだとはかぎらない——やいなや、新理論を完全に理解したものと、そして事なくそれを運用できるものと信じている場合が、じつにしばしば見られます。そして私はこの非難を近ごろの「マルクス主義者」の多くの人々にくわえないわけにはいきません。じっさいここでは、おどろくべきがらくたがつくりだされているのです。」

(ヨーゼフ・ブロッホあてのエンゲルスの手紙 1890. 9. 21/22)